

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月17日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17292

研究課題名（和文）道徳的ジレンマ状況における「行動」と「判断」の乖離に関する検討

研究課題名（英文）Comparison of Decision Making by Agent and Judge in Moral Dilemmas

研究代表者

橋本 剛明（Hashimoto, Takaaki）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教

研究者番号：80772102

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：5人を救うために1人を傷つけることは許されるか。あるいは自分ならばその行動をとるか。道徳ジレンマ状況での、このような功利主義的な「判断」と「行為遂行」を比べたとき、人々が示す反応が異なるかという点、およびそれぞれの意思決定を規定する心理過程の違いについて検討した。調査と実験の結果、「行為遂行」に関する意思決定時に、人々は「判断」時よりも多くの葛藤を経験する傾向が認められた。その一方で、個人差として自己制御能力が高い個人の場合には、葛藤が抑制され、功利主義的な「行為遂行」が志向されることが、データより明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、道徳ジレンマでの意思決定について、「判断」と「行為遂行」を区別し、それぞれの意思決定に至るまでの心理過程の差異を、自己制御の観点から明確化したことに意義がある。また、課題中のマウスカーソルの動きを分析する手法により、意思決定時の個人内の葛藤を計量化して検討した点にも特色がある。本研究は、社会の中で、道徳が関わる題材について当事者と第三者で見解が異なる場合や、それが問題につながる状況に対して、その原因の解明に資する知見を提供する。

研究成果の概要（英文）：The project examined whether there exist differences in how people make “judgments” about the acceptability of utilitarian actions in moral dilemmas and how people consider “acting” them out as an agent. Based on two empirical research, it was found that people experience greater conflict when in the role of an agent compared to a judge. Moreover, the data indicated that people who take the agent’s perspective show a significant decrease in conflict when they have high self-control traits.

研究分野：社会心理学

キーワード：道徳ジレンマ 功利主義的判断 判断・行動の乖離 自己制御 共感性 マウストラッキング

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、道徳ジレンマにおける人々の意思決定を検討対象とした。本研究で注目したジレンマは、「多数者の利益やウェルビーイング」を達成するために「少数者の犠牲」が求められる状況である。たとえば5人を救うためにやむをえず1人を傷つけるという行為は、研究上、功利主義的な価値観に沿った反応と位置づけられる。本研究課題では、人々が功利主義的な判断あるいは行動をとることに関わる心理過程を検討した。

そのような道徳ジレンマにおける意思決定の実証研究としては、脳神経科学や道徳心理学などの分野で知見の蓄積がみられる(e.g., Greene et al., 2001; 信原, 2012)。それによると、功利主義的な危害の遂行に伴うネガティブ情動の喚起が、当該行為への否定的反応を生む。その一方で、理性的推論過程が働き、情動反応が認知的に制御されると、功利主義的行動への支持がみられるとされている。ただし、個人特性の認知的制御が、ジレンマ判断を規定するかについて、先行研究の知見は必ずしも一貫しておらず(Moore et al., 2008; Paxton et al., 2012; Royzman et al., 2015)。そのメカニズムの解明にはさらなる研究が求められる。

そして、道徳ジレンマにおける意思決定を検討する上で重要と考えられる要素が、人々がどのような視点からそれを考えるかという点である。社会心理学領域の研究では、人間が第三者として示す判断と、当事者としてとる行動とが必ずしも一致しないことが明らかになっており、たとえば客観的には反道徳的だと答える行為を人がとりうるということが指摘されてきた(e.g., FeldmanHall et al., 2012; Monin et al., 2007)。道徳ジレンマを題材にした研究でも、行為が一般的に許容されるかという「判断」に比べて、自らの「行為遂行」の可能性を問われると、功利主義的な回答が多くなることが報告されている(Tassy et al., 2013)。このような道徳ジレンマ状況での「判断・行為遂行」間の潜在的な乖離について、現象の記述的な報告がある一方で、そこに具体的にどのような心理のプロセスが介在するかは、本研究の申請段階で、十分に解明されていない状況であったといえる。

## 2. 研究の目的

研究開始時点の状況を踏まえ、本研究課題では、道徳ジレンマ状況下での「判断」と「行為遂行」の差異を明確化することを目指した。先行研究で示されている知見、すなわち行為者の立場に置かれた人物が、判断者に比べて功利主義的の反応を示しやすいという点を確認した上で、意思決定に至るまでの心理のプロセスにおいても、立場に応じた特徴が存在するのかを検証した。それにあたり、次の2つのポイントを設定した。

### (1) 意思決定と心理的自己制御の関連性の検討

道徳ジレンマとは、相反する価値規範が個人の中で顕在化し、葛藤を生じさせる状況である。そのような状況下での意思決定には、一方の反応目標に注意を向け、目標不整合な反応を抑制し、葛藤を解消するプロセスが介在すると考えられる。本研究では、そのような自己制御の過程で、判断者と行為遂行者の差異が認められるかを調べた。

この点を検証するアプローチのひとつとして、本研究では、自己制御に関わる個人特性を検討の俎上に載せた。具体的には、実行注意に関わる制御能力の指標であるエフォートフル・コントロールと、目標間の葛藤への対処能力の指標であるセルフコントロールの2つの要因を研究に組み込み、意思決定との関わりを探った。

### (2) リアルタイムの意思決定プロセスの精査

自己制御過程について検証するための、もうひとつのアプローチとして、意思決定時に個人が経験する「葛藤」の程度を数量化して捉えることを試みた。その手法として、本研究では、マウストラッキング・パラダイム(Freeman, 2018)を実験に実装した。当該パラダイムは、意思決定課題の最中の参加者のマウスカーソルの軌跡を記録し、解析するというものである。本研究では、行為遂行者と判断者の間で葛藤の量やパターンに違いがみられるか、また自己制御特性に応じた特徴が認められるかを検討した。

## 3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、下記の2つの実証研究を実施した。

### (1) 研究1

参加者150名を対象に調査を実施した。調査では、まず成人用エフォートフル・コントロール尺度日本語版(山形ら, 2005)で、参加者の注意制御能力の個人差を測定した。また、道徳ジレンマへの意思決定に関連するとされる共感性の個人差を測定した(桜井, 1988)。そして、12種類の道徳ジレンマシナリオを呈示し、それぞれについて功利主義的な行為が「許容されるか」(判断)および「自らが遂行するか」(行為遂行)を尋ねた。

## (2) 研究2

参加者 87 名を対象に実験を実施した。まず、参加者の自己制御特性について、セルフコントロール尺度邦訳版（尾崎ら，2016）を用いて測定した。そして、4 種類の道徳ジレンマ状況について、パソコン画面上で反応を求めた。参加者の半数は、行為者視点からシナリオを読み、行動を遂行するかしないかを選択した（行為遂行条件）。残りの半数の参加者は、第三者視点で描写されたシナリオを読み、登場人物がとる行為が許されるか許されないかを選択した（判断条件）。この意思決定課題の際に、参加者が選択肢を選ぶまでのマウスの座標を 15 ミリ秒ごとに記録した。

## 4. 研究成果

### (1) 研究1の成果

12 種類のジレンマ状況について、参加者の回答傾向の割合を算出したところ、功利主義的な反応は、許容度判断の場合に約 4 割、行為遂行の場合に約 3 割であった。すなわち、判断に比べて行為遂行における功利主義的な回答の割合が少なく、この点では Tassy ら（2013）の先行研究の結果と一致しない。

意思決定に自己制御と共感性がどのように関わるのかを、ジレンマへの回答の割合を従属変数としたロジスティック回帰分析により検討した。すると、「判断」と「行為遂行」に関する回答それぞれにおいて、自己制御（エフォートフル・コントロール）と共感性の交互作用効果が認められたため、各効果を詳細に検討した。

まず、「判断」について、自己制御得点が相対的に低い個人では、共感性が高いほど功利主義的回答が少なかったのに対し、自己制御得点が高い個人ほど、共感性とは無関連に判断を示しやすかった（図 1 参照）。一方で「行為遂行」については、その逆のパターンがみられ、自己制御が低い個人では共感性と反応の結びつきが弱く、自己制御特性が高い個人ほど、共感性に応じた反応を示しやすかった（図 2 参照）。

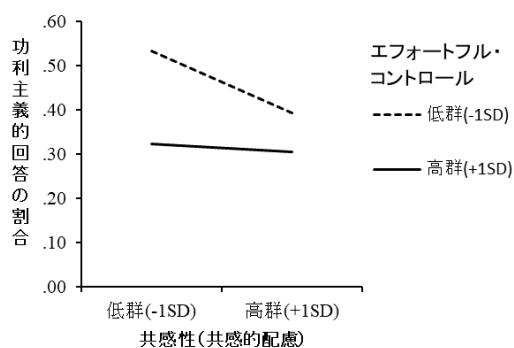


図 1. 自己制御特性と共感性が「判断」に与える影響

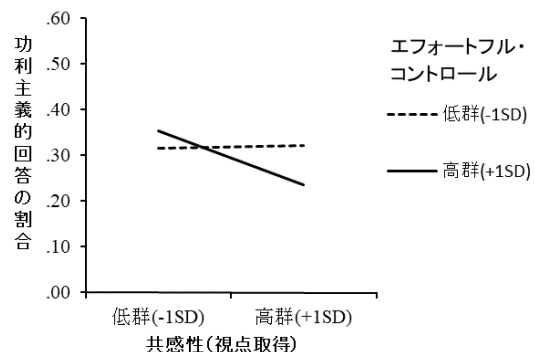


図 2. 自己制御特性と共感性が「行為遂行」に与える影響

これらの結果は次のように解釈される。「判断」と「行為遂行」という 2 種類の課題のもとで求められる意思決定の性質は異なるが、その違いに応じた反応を、自己制御特性が高い個人ほど示しやすかったといえる。具体的に、自らの「行為遂行」について回答する際には、その状況下での自らの反応を想起し予測する必要があるため、自己の内面へと注意を向けることが求められる。その場合、自己制御特性が高いほど、自己に対して注意を選択的に向けるため、内的属性としての共感性にもとづいた反応が導かれやすかったと考えられる。一方で、「判断」について回答する際には、より客観的な評価を下す必要があるため、自らの内的反応とは切り離れた認知が求められる。自己制御特性が高いほど、そのような課題の要求に沿って、自らの共感特性とは独立に判断が行われたと考えられる。

以上の知見は、自己制御能力が、道徳ジレンマでの意思決定に一樣な効果を持つのではなく、どのような立場から判断を行うかとの相互作用の上で機能することを示唆するものである。

### (2) 研究2の成果

4 種類のジレンマ状況についての功利主義的な回答の割合を平均すると、行為遂行条件では約 44% であり、判断条件では約 51% であった。研究 1 と同様、危害行為に対する肯定的反応は、行為遂行よりも判断の場合に多いことが確認された。

次に、意思決定時のマウスカーソルの軌跡を解析した。軌跡の湾曲度や複雑さの面で、行為遂行条件と判断条件に違いがみられるかを検討したところ、参加者が功利主義的な反応を示した試行において条件間の差異が認められた。具体的に、行為者は判断者に比べて、最終的に選ばなかった選択肢の方向へのカーソルの湾曲が大きく、複雑さの指標であるエントロピーも大きい傾向にあった（図 3 参照）。すなわち、功利主義的な選択をするまでの葛藤を、行為者が経験しやすかったことが示唆される。なお、功利主義的な選択をしなかった試行では、行為者と判断者の軌跡に差はなかった。

回答者功利主義的反応を示した場合に条件間の違いが発見できたことから、そのような回答が示された試行に絞り、さらなる詳細な分析を行った。自己制御特性（自己コントロール尺度得点）を交えて検討したところ、行為遂行条件で、特に自己制御特性が高い個人の場合は、判断者に比べてカーソルの移動やエントロピーが少なく、反応スピードも速いことが明らかになった。

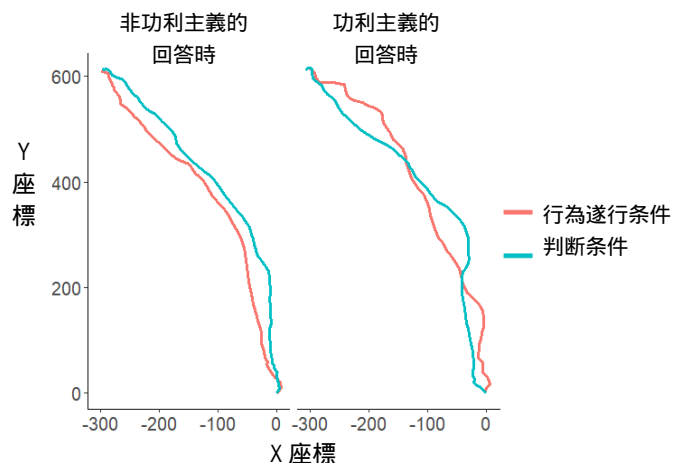


図3. 意思決定時の平均的なマウスカーソルの軌跡  
(選択時は下から上方向に移動)

得られた知見は、次のようにまとめることができる。まず、意思決定時に個人が経験する葛藤の度合いは、基本的には、「判断」よりも「行為遂行」についての意思決定の際に大きいといえる。ただし、重要なポイントとして、個人の自己制御能力が高い場合には、功利主義的な「行為遂行」を志向する上で葛藤の抑制が行われ、素早い決断につながるのである。これは、自己制御プロセスが、トップダウン的に働き、行動遂行を支えていることを示す結果である。

### (3) 成果のまとめ

実施した2つの研究で一貫して、「判断」に比べて「行動遂行」では功利主義的回答が少ないという結果が得られた。この傾向は、研究2で示されたように、行為者は判断者よりも心理的葛藤を強く経験することに起因すると考えられる。その上で、本研究を通じて得られた重要な知見として、行為者と判断者で、自己制御の機能の仕方に違いがみられることが明らかになった。行為者の立場に置かれると、人は自己の内的状態に注意を向け、自らの反応をトップダウンで制御することが、判断者よりも必要になる。本研究では、その過程について自己制御の個人差の観点から検討し、実証的示唆を得ることができた。

上記の知見は、人が意思決定時に経験する心理的葛藤の程度を、マウストラッキング・パラダイムにより計量的に検討したことで明らかにすることができた。これは、本研究の方法論的な特色のひとつといえる。道德ジレンマなどの、困難な意思決定を迫られた人間の反応傾向を解明する上で、本研究で採用したようなリアルタイムの計測手法は、重要なツールとなることが期待される。本研究のデータは、その有効性を提起するものであり、今後は、視線計測など他のアプローチとも組み合わせ、さらに知見を精緻化することが求められるだろう。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 3 件)

Hashimoto, T., & Karasawa, K., Effects of agency on morally instrumental harm: A mouse-tracking investigation, 2019 Society for Personality and Social Psychology Convention, 2019

榊原瑞清・櫻井良祐・橋本剛明・唐沢かおり、道德ジレンマ問題で道德判断と行動選択の差を生じる要因の検討：自己制御と共感、日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会、2017.

Hashimoto, T., Sakurai, R., Shiraiwa, Y., & Karasawa, K., Effects of trait self-control on people's decisions toward moral dilemmas, AASP 2017 Conference, 2017.

## 6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。